

「中間まとめ」に関する地域説明会 尾花沢会場における質疑応答の概要

< Q : 会場からの質問・意見

A : 検討委員会委員長、教育次長、高校改革推進室長の発言 >

Q : 今回の意見は第5回の検討委員会にどのように反映されるのか。

また、今回は4地区で説明会があるが、それ以外の地域の意見をどのように集約していくのか。

A : 今後、各会場でいただいた意見をまとめて、第5回検討委員会に報告し、修正するところがあれば修正し、教育委員会に答申することになる。

この説明会以外については、アンケートや意見聴取を実施しているので網羅されていると思っている。さらに意見があれば寄せていただきたい。

Q : 3校か2校かの案が具体的にないで、アンケートなどによって意見が変わってくるのではないかと思うがどうか。

A : 検討委員会は、最初に3点の検討依頼を受けた。その時に、今ある4校をどうするかを考えると、検討がそこからずれてしまうのではないかということになり、今ある4校を考えずに検討を進めた。

まず、この北村山地区はどのような人材を望んでいるのか。例えば、果樹を重視するのであればその人材を育成するもの、工業団地であれば工業に関する学習が必要、普通科も、東南村山地区に進学しなくてもいい学校、ということで、いったい何校くらいの学校が考えられるのか。

それから教育内容や活動。部活動はたくさんあったほうがいいのかという中学生の意見がある。そうすると、どのくらいの規模で、何校くらい必要かということになってくる。

その後、具体的に今ある4校をどうするかになるが、それは検討委員会ではなく、答申を受けた県教育委員会が検討していくことと思う。

さまざまな意見の中で、例えば、普通科高校の進学の実績ということは多くの人から寄せられているので、そういうものはしっかり盛り込んでいきたい。

Q : 北村山地区だけ対象になり、北村山地区だけ検討している印象を受ける。例えば、置賜や庄内や最上の状況はどうなっているのか。例えば、同じ村山の中の西村山もあるし、山形を中心にした地域もある。そういったところの状況はどうなっているのか。

A : 同様のことについては別の会場でもあり、県全体で考えてはどうかという意見もあった。少子化は、県内全体のことであり、北村山地区だけではなく、「県立高校教育改革実施計画」があり各地区で取り組んでいる。

A：県教育委員会では、平成 17 年から 26 年までの 10 年間の高校再編の計画を立てているが、北村山地区の再編は、平成 18 年と 19 年の検討としている。他の地区では、西村山地区と西置賜地区を平成 20 年と 21 年に検討する。

北村山地区の説明をしたが、全県では平成 16 年 3 月と平成 26 年 3 月を比べると、3,000 人ほど減少する。公立高校の定員は全体のおおよそ 7 割と考えているので、2,100 人ほどになる。2,100 人を 1 クラス 40 人の人数で割ると 52.5 学級。多めに見て、おおよそ 55 学級。その学級数に相当する生徒が少なくなる。55 学級は、1 学年 5 クラスある学校が 11 校である。それほど生徒数が少なくなる。

そこで、昨年と今年度に、北村山地区の県立高校の再編整備に係る検討委員会を設置して、大瀧委員長を始め合計 12 名の委員に検討をお願いしている。

来年度からは、西村山地区と西置賜地区の検討を始める。今、酒田市内では 4 校を 1 校にすることで検討を進めている。

また、全体として学級数を削減するということで、22 年度の県の再編計画を検討している。

Q：最上地区に関してはどうなっているのか。

A：最上地区は、平成 15 年度に新庄農業高校と新庄工業高校について、それまで 3 学級と 5 学級だった学校を、6 学級の学校として 1 校に再編している。

Q：県内の高校の志望状況が出て、各地域の状況を知ることができるが、最上にはもっと小さい学校があり、それは事情があると聞いている。その他にも、県内にはいろんな事情の学校があると聞いている。

北村山地区から、山形市方面に相当進学しているが、20 年以上前に、山形市方面に進学できなくなる話があり、地域の運動で撤回してもらったことがある。地域をあげての運動で、方針が挫折するようなことがあれば、この問題はおかしくなってしまうと思う。

A：4 高校を視察して、どの学校の生徒も一生懸命で、純粹で、すばらしい学校で、すごくいいと感じた。しかも、普通科、農業科、工業科、総合学科で全部違っている。全部残したい学校だということで、検討委員会でも苦労した。そこで、検討委員会では、最初に理想論から入った。

まず考えたのは、学校の規模が小さいために、入ったら野球部もつukれない、演劇部や合唱部に入りたくてもできない、というようなことで本当にいいのか。また、生物を教えるのに、専門の先生がいないので、別の先生がかけもちで教えるようなことが幸福なのかということである。そうすると、ある程度の規模でなければならない。規模の小さな高校が近くにあれば便利ではあるけれども、生徒は幸福とはいえないのではないかということになった。

何を重視しなければならないかという時に、今までの学校のことは考えないで、適正規模の学校で、先生が充分いて、十分な施設・設備で、十分に部活動ができる、そ

ういう高校を目指したほうがいいというスタンスに立って検討している。

Q：基本的に、教育とは何か。少子化で、学校が小さくなり、学力向上も、部活動も進まないとあったが、教育は簡単なものでなく、歴史がある。それを検討してほしい。
数パーセントしか生徒の希望がない農業高校も、農業が立派に成り立っていた時は、相当の生徒がいた。経済情勢や少子化などさまざまなことを考えて、当時の学校の在り方が検討されてきたと思うので、そうした歴史も考えてほしい。
この高校改革で良かったということは、5年10年では分からないと思っている。今後10年後、20年後の長い目で、改革に取り組んでもらいたいと思う。

A：そのとおりと思う。村山農業高校を視察したが、大変すばらしい。農業高校への希望が少ないのは、生徒が農業高校の中身を知らないからではないか。大学でも農学部は受験者が少ない。他の大学では、農学部の学科名を変えたら受験生が集まった。誤った観念で、農学部や農業高校をとらえているが、実は中身は面白く、バイオテクノロジーの先端を扱っており、そういうことが伝わっていないので、PRが必要だと思っている。数が少ないのは人気がないのではなく、中身を生徒や一般の保護者に理解されていないということがあると思う。決して軽視されているわけではない。

グローバルという言葉があるが、重要なのは、そこで育てて、外に出て、自分のこの地区に目を向け、もう一度戻ってくるような人を育てることが大切である。

西澤潤一先生が、グローバルだけではなく、ローカルを併せた、グローバルということが、教育では重要だと言っていた。

世界が重要だという教育だけでは破綻するし、また、ローカルだけでもだめで、グローバルということ、高校教育や地域で教えていく必要があると思っている。

Q：3校で進めようとした場合、どことどこを組み合わせるということまであるのか。

A：そこまではない。検討委員会が依頼されたのは、まず、北村山地区にどういう人材の育成が望ましいか、そのために、どういう教育内容が望ましいかということである。このどういう教育を実施したいのか、活動内容はどのようなものか、ということがあって、それではいくつぐらいの高校の数が必要か、ということになった。

検討委員会でもさまざまな意見があったが、2校という案も考えられるが、おおかたは3校ぐらいだろうといことになった。それでは、どことどこを組み合わせるのか、ということになるが、それは、検討委員会ではなく、教育委員会の検討ということになる。この検討委員会の課題としては、何校くらいになるのかがいいのかということまでと理解している。

Q：県教育委員会として、その後の具体的な進め方のスケジュールはどうなっているのか。

A：全県的に再編を進めているので、全体のバランスを考えながら進めていくことにな

るが、平成 24 年から 26 年度の検討課題としている。

高校は建物の完成までに 4 年から 5 年の期間が必要である。そうすると、来年決まったとしても、それから 4・5 年先のことになる。

Q：農業科と他の学科を一緒にして、あまり成功していないのではないかと思う。農業高校は山形県で何校残すのか、工業高校は何校にするのか、それから普通高校やその他の学科の高校が何校必要かという観点に立った検討が必要と思う。

北村山地区の 4 校は素晴らしいという話があったが、最初に 3 校ありきであるならば、本当に教育を考えているのかということになってしまう。

日本全体、山形県全体を考えて、これが必要だということにならないと、やがて日本は衰退してしまう。農業が衰退したら日本はどうなるのか、ということ考えた上で教育を考えていくことを要望したい。

A：新庄神室産業高校を訪問したことがあり、面白い話を聞いた。農業は長い時間、例えば 1 年の時間をかけて成果が出る。ところが、工業はうまくいけば、すぐ成果が出ることもある。そういう違う学科が一緒になったことで、農業の生徒が工業を、工業の生徒が農業を学ぶことで、いわゆる学際的になりいいということである。

村山農業高校については、伝統もあり、さまざまなことも聞いた。山形県は農業県という面があり、日本の自給率も低いので、農業は大切であると思う。

決して数合わせの 3 校ではなく、人材の育成や、適正規模や、これからの高校教育のことを考えてのものである。

どういう学科をどう配置していくのか、ということについては、これからの問題だと思っている。

Q：小学校の保護者へのアンケートは、小学校の何年生を対象にしてのものなのか。

A：アンケートは、PTA の役員の方を対象にしており、全学年になっている。学校によってばらつきはあるかもしれない。

A：3 校案となると、あの高校がなくなるのではないか、などという噂が流れ、ますます変な方向に流れてしまう。そういうことはありえないし、注意しながら進めなければならぬと思っている。

以 上